

近江町MAP



神明キャンプ場

▲蓮如上人お手柄松の株が残る



日光寺



多和田

かぶと山ハイキングコース

▲オムラサキの保護活動がおこなわれているかぶと山。鮮やかな紫色のオムラサキは国蝶にも指定されている。

びわ湖



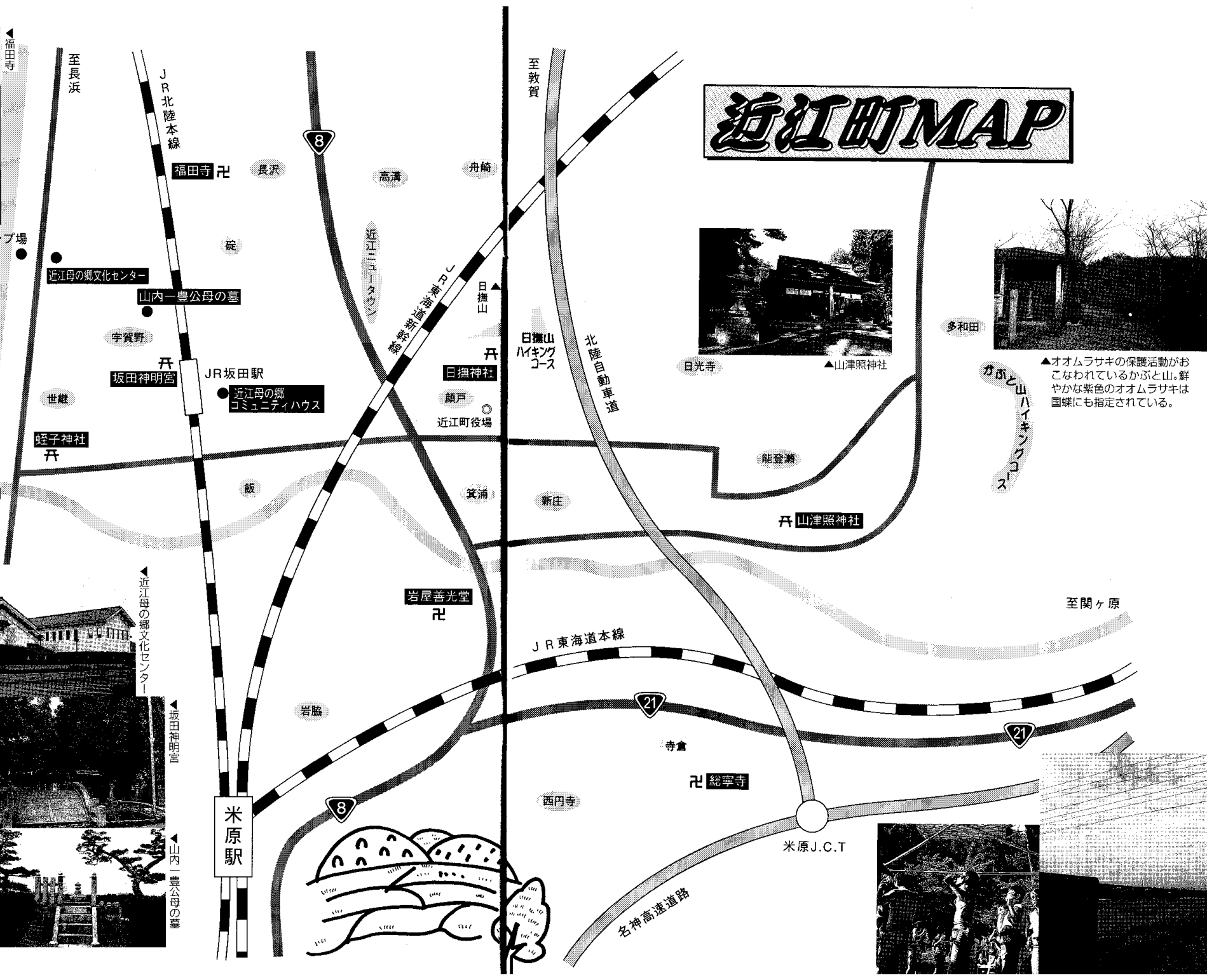
坂田神明宮



山内一豊公母の墓



近江母の郷文化センター



古墳を飾るものたち

「近江町高溝狐塚遺跡」

市立長浜城歴史博物館

学芸担当主査

中島 誠 一



近江町内には、数々の古墳が認められ、その出土遺物もまた豊富である。ここでは、縄文時代早期・弥生時代中後期、古墳時代後期、平安時代後期の四時期の複合遺跡である狐塚遺跡の出土遺物にスポットをあて、近江町の文化の一端を紹介しようと思う。

四時期の複合遺跡である狐塚古墳であるが、このうち、古墳時代の遺跡は、円墳四基（一号墳・四号墳）と帆立貝形古墳（五号墳）により形成されている。そのなかでも最初につくられた五号墳と、二番目につくられた一号

墳からは、多量の埴輪が出土している。埴輪の多くは、土管のような形をした円筒埴輪と、さらに上部の広がった朝顔形埴輪であるが、このほか形象埴輪とよばれるさまざまな形の埴輪が出土している。では、この形象埴輪のいくつかを具体的に見てみよう。

〈冢形埴輪〉

死んだ首長と権威継承者の権威を示すには、わであるが、高さ九十cmと大型のもので、入



母屋、棟飾りを持つ。入口は細く開けられており、まびさしをつける。

〈大刀形埴輪〉
細長い円筒形の上部に絵を作り出し、三輪玉などのかざりをつけた護拳部を持つ。剣身は表さず、鞘の中に納められた状態をかたどったもの。また刀子の反対側には、盾の形を貼り付け、盾の持つ象徴的な意味あいをつけ加えている。盾面には、日字形の区画があり、鋸歯文が刻まれている。

〈盾形埴輪〉
形象埴輪の中でも、形態の特徴が単純で、その認定が容易であるため、最も普遍的な埴輪となっている。盾面を日字形に分割し、外側に鋸歯文を刻み、内側には、円を×で分割した文様が見られる。

〈鶏形埴輪〉
鶏は鎌を上に向けて矢を納め、背負って使用する武器であり、矢羽を上にして矢を納め腰に下げて使用する胡録とは区別される。

通常、五世紀代の古墳に多く認められる形象埴輪であるが、鶏形埴輪の出土した狐塚五



- ① 双鳥形埴輪
- ② 冢形埴輪
- ③ 大刀形埴輪
- ④ 盾形埴輪
- ⑤ 鶏形埴輪
- ⑥ 朝顔形埴輪
- ⑦ 蓋形埴輪

号墳は六世紀前葉のものであり、最も新しい時期のものに該当する。このため表現などに、幾分退化した傾向が認められる。鶏形埴輪の顔には、わずかにトサカと目の表現があり、背が低く、首が太いという特徴を示している。また下方には線刻で足の表現が残されており、ユーモラスな表現がとられている。

〈双女形埴輪〉

通常、武人が持つ弓を女性が持っている。このことから考えても、この女性は特別の権威を認められたシャーマン（巫女）と思われる。

〈蓋形埴輪〉

蓋形埴輪は、貴人にさしかける傘をかたどったものである。傘本体は、上開きの円筒形台部に表される。その作製方法は、まず円筒形台部からそのまま傘部上半へ移り、あとから傘部下半を取り付けると言う順番である。このため傘部の上半部は緩く丸みを持っているのに対して、下半部は直線的に開くという独特の形態が生まれる。そしてこの傘部の中心には、小さな円筒部が作り出され、二枚のU字板を直交させた形の立ち飾りは、その基部にある軸部を差し込んで組み合わされる。

以上紹介した形象埴輪は、いずれも古墳時代後期の遺物である。これら形象埴輪は、近江町のおかれた古墳時代の歴史的環境を知る上で重要なことはもちろんのこと、古墳時代の人々の風俗やマツリ、そしてさまざまな器物を知る上で極めて重要である。